

モデルからマルクスへ —現代地理学の「再モデル化」に向けての計画に関するノート—

デイヴィッド ハーヴェイ 著, 鶴田英一 訳

1967年の *Models in Geography* の出版は、地理学思想の発展において一つの分水界を示していた。それは、地理学界の有力な、やがて主導的立場に立つことになる研究者グループによる、地理学の主要な課題への全ての新しい接近方法の統合を象徴していた。同書の中の「人文地理学における空間パターン展開モデル」と題する拙稿は、いくつかの特定の関心事を明示しようとした。これらの関心事は、20年来消えることなく、筆者の思考の中に常に残っていた。変化したことは、解答を追求する方法である。

拙稿の序章は十分に率直かつ簡潔な問題提起であった。筆者は、全ての地理学は必然的に歴史地理学であると論じた。なぜなら、社会形態の起源の研究及び時空間にわたる変化の過程の分析を通じてのみ、現代の地理を理解しうるからである。筆者はそこで、歴史地理学者の専門的研究と現代の分布に関する人文地理学の分析技術の発達との間の「不幸な相違」を嘆いていた（そして、今も嘆いている）。それゆえに、焦点は起源、過程及び変化に置かれなければならなかったのである。筆者は、時間と歴史の重要性を弱める純粋に空間科学的方法に固執続けたハーツホーンの立場を拒否した。そして、時空間にわたる社会変化を直接扱う（ラッツェル、ホウィットルシーからサウアーに至る様々の立場の研究者による）地理学的業績に関心を抱いていた。

当時そこで捉えた問題は、時空間的過程を調査する厳密な方法を明確に示すことが、一見不可能に見えたことであった。その方法が見えてこないために、地理学者は個別事例の研究という枠の中に閉じこもるか、さもなくば厳密な分析と議論の代用として乱暴なアナロジー（その中でも最も有害であったのは、全てを有機体に見立てる生物学的アナロジー）や不統一なメタファーに依存することを強いられていた。それゆえに筆者は、地理学者が前世代から残された「刺激的で素晴らしい

アイディアを規範的な科学研究手続きによって立証、棄却もしくは修正し、科学者になること」が、絶対に必要であると判断した。

そこで何が変わったのか？以前にもまして現代において更になお、全ての地理学者は歴史学者でなければならないこと、社会変化の起源と時空間のプロセスへの関心は純粋な空間パターンの記述よりも優先されなければならないこと、そして地表での人間居住の歴史地理の中の紆余曲折に光を当てうる科学的に厳格な理論構築への道を探しださねばならないということ、を引き続き主張する。変化したことは、筆者の科学観とそのような対象に正しく使用しうる方法観である。*Models in Geography* の大前提は、実験的科学及び自然科学から導出された特定の科学的方法が、その形式と内容にかかわらず全ての地理学的課題に適用されうるということであった。この基礎的前提に対する様々な挑戦という視点から、後の地理学思想の分裂と展開は理解されねばならない。

「自然科学の方法」なるものに対する度を超えて単純素朴な信頼、そして少なくとも筆者の志向する類の研究対象への、その方法の適用可能性に対するそれ以上に度外れの単純素朴な寄りかかりがあったと思われる。一方では、あまりにも長きにわたって主観のレンズを通して観察されてきた世界の客観的記述を可能にする「中立な」言語を探し求める実証主義者の努力は、全く称賛に値するほど客観的であるように見えた。しかし、この類の言語を歴史地理の豊かな多様性を理解するのにふさわしく明確化することは、不可能ではないとしても極めて困難であることが判明した。実際には、終始一貫、その豊かな多様性が、マルコフ連鎖、単純な学習モデル及び拡散モデル等といった枠組みの中に、単にこれらの数学的言語の処理のたやすさのみを理由として、押し込められたのである。そのような数学的言語を用いて真の理論的議論を展開することは、実際は非常に難しく、研

究対象が歴史的一地理的展開の絶え間ない流れとして捉えられる状況の下では、実証主義的な(ポッバリアンの)証明もしくは誤謬の基準を適用することは、なおさら困難であることが立証された。その一般的な過程の中で、いくつかの要素、例えば地方銀行や自動車所有の拡散のようなことについてのモデルを構築することは可能かもしれないが、それは必ずしも、より一般的な歴史的一地理的過程の理解に少しばかり特異な次元を付け加える以上のことをしたわけではなかった。封建制から資本主義への移行、あるいは資本主義それ自身の展開過程の問題は、この種のモデルによっては把握しえないことが明らかであった。実際、モデル構築の努力は、こういった、より基本的問題の文脈を提出したとき、たとえそれが独立した、再生可能な事物に関する幅広い概念に基づく技法によって、合理的に着手され、証明されるような場合でさえ、取るに足らないものであり、特に何かを解明したというほどのものではないのであった。

この無謀な時期以来、モデルの構築に熱心な者は、大方のところ、解明の対象とする問題の性質を制限することによって、ようやくそのモデル構築をなしえてきたものと考えられる。通勤流動、商業活動、はしかの流行、汚染物の大気拡散等々といった空間的行動は、以前よりもはるかに確度及び精度を増してモデル化しうるのであろう。そして、この成果は劣ったものではないことに筆者は同意する。しかし、1970年代における第三世界の対外債務の急激な増加、新しく、外見上は従来と全く異なった生産様式であるフレキシブルな蓄積への顕著な移行、地政学的緊張の増加、更には重大な環境問題の説明に関して、我々は何を述べるのか？その上、主要な歴史的一地理的移行過程(資本主義の隆盛、世界戦争、社会主義革命等)に関して我々は何を知っているのか？それだけではなく、実証主義的手順による知識の追求は、必ずしも利用に耐える概念及び理論の形成をもたらしはしなかった。今までに地理学の文献において、ある程度のレベルで正しいと証明された数多くの仮説があるには違いないが、結局これらは全体としてがらくたの山になってしまっているという印象が残る。これは、もちろん、慎重な理論構築の代わりとしてのモデル使用の慣習化、すなわち単

なるデータの加工、計量的分析及び統計的推定への悲しむべき墮落に起因するところもあるだろう。しかしそのことは、我々が理論化しつつあることがらを自ら知っている(もしくは賛同する)ことを、前提としていえることである。おそらく、筆者は、まさに資本主義の歴史地理学に関する理論化を試みたゆえに、多くの同僚と決別し、理論構築への、異質であるが同様に厳格な方向性を追求したのである。だがしかし、我々は世界歴史地理理解の新しい地平を切り開きうる、正しく構築された理論と方法へと向かう道をどこに見つけることができたのだろうか？

伝統的地理学的美徳の一つは、怪しげな適用のされ方をすることが多かったとはいうものの、その確固とした唯物論的志向であった。環境もしくは地理学的決定論—おそらく地理学者がある程度首尾一貫して展開した唯一の理論—は、純粹に歴史的決定の唯物論的理論に危険なほど接近した。そしていわゆる「可能論者」の対応でさえ、人間主体、主意主義、そして更に人間のモティベーションとしての観念論に集中してはいたものの、依然として環境条件の拘束力に対する積極的評価と観察・理解の対象である人工物としての物質的景観への愛着を示していた。「地域」は地理学研究の典型的な「理論的对象」となっていた(そして、そのようなものとして、*Models in Geography* のデイヴィッド・グリグによる章のような認識論的吟味の対象となることが多くなった)。地理学者が、心の中の未知の国に関心を持ち、メンタルマップ、地理的認知及び「地理的生活世界」の解釈的経験といった事柄についての理解を、地理学のより伝統的な関心事に統合しようとするようになったのは、ごく最近のことである。

回顧してみれば、唯物論が深く浸透していたこの地理学という学問分野が、マルクスの史的唯物論によってながらく影響を受けないままであった(ある者は疑いなく「無事であった」というだろうが)ということは、驚くべきことにみえる。「欧米」の地理学における明白なマルクス主義的伝統の欠如をどう説明してよいかわかるには分からない。しかし、1967年にはまだ(たとえ同年にアンドレ・ガンダー・フランクが自らのその後の業績の基礎となる『ラテンアメリカにおける発展途上の展開』を出版したとしても)マルクスとマルク

ス主義は、地理学においては、ほとんどその存在を知られるに至っていなかった。*Models in Geography*においてこれに唯一論及したものは、パールの「地理学における社会学的モデル」に関する論文であり、社会学における社会変化の源泉とパターンについての議論のなかで概略的に言及したものであった。1930年代においては、多くの地理学者が確かに左翼思想をもてあそんでおり（たとえばケンブリッジはその温床であった）、一方でフランスにおいては地理学の業績には顕著なインパクトはなかったが、多くの地理学者が共産党員であったピエール・ジョルジュの影響下にあったことから、明示的なマルクス主義の伝統の欠如は一層奇妙である。それは、ほとんどあたかも地理学者の研究業績が本来それ自身として十分に唯物論的で、直接的にも間接的にもマルクスの言説を借用する必要などなかったかのようであった。ラティモアは、自分の商品理解が、マルクスの『資本論』の習熟からよりも、アジア内陸の貿易ルートを研究することによって得られたものであることを主張するとき、必ずそのように議論していた。1920年代に非常に明確に地理学とマルクスの史的唯物論との関連を認識していたウィットフォードは、戦後において地理的決定論と抽象的史的唯物論（ウィットフォードは常に根本的な誤りを犯していたためにあえて「抽象的」という用語を使用する）そして強烈な反共産主義の奇妙な混合によって、最悪に問題を混乱させた。もちろんマッカーシズムはアメリカにおいてその犠牲者を出し、冷戦もまたイギリスでその犠牲者を出した（イギリスの地理学の歴史において、まだ解決されていないエピソードがある—それは崩壊しつつあった大英帝国の様々な地位において左遷もしくは追放された多くの左翼のシンパが確かに存在したことである）。地理学における問題は、冷戦の暗い日々から1960年代後半の社会的関心の高揚期を通して、マルクス主義科学の枠組みを守り続けたモーリス・ドップのように高い水準にある者、もしくは（もし実際にそれが真に光り輝くものであったなら）E. P. トンプソンのようにガッツのある者が、この学界に一人も存在しなかったことにあると考えられる。マルクス主義の選択肢が欠如した中で、社会問題の改善を試みた人（そして、*Models in Geography*に関係した多くの人は、人

間の解放という目的に向かって知識の力を動員することに深くかかわっていた）は、高度に技術官僚的合理性を有する手段を用いて、それを行った。そして、もちろん、このことは（その点に関する限りにおいては）*Models in Geography*の精神的・倫理的なバックグラウンドであった。

地理学と史的唯物論との対面は遂に達成され、地表上における人間居住の歴史地理の理解への新しい道が完全に開かれた。それはまたマルクスの言う「自然科学の抽象的唯物論、歴史とそのプロセスの欠如した唯物論の弱点」をさらけ出し、地理学の統一を方法の統一としてみる者を世界の「抽象的及びイデオロギー的概念」へと必然的に導いた。マルクスの提唱したもう一つの「科学」の概念は、荘厳な理論構築とその説得的な歴史地理学的説明への道を指し示していた。それは、また更に人文科学の統一への努力が、自然科学の「抽象的唯物論」に従った社会科学、地理学、歴史科学及び人文諸科学の形式よりも「人間味を持った」そして歴史的な自然科学の理解に基づかなければならないことを示唆していた。

しかし、マルクス主義的方法はたちまちのうちに理解されるものではなく、実際は何らかの特殊技術と同様、訓練、批判的評価そして何よりもまず経験を必要とする。マルクス主義的伝統の欠如のために、マルクス主義的挑戦を開始しようとした者は独学を強いられた。このことは、試行錯誤を進んで行くことを意味する。それはまた活気に満ちた対決と興奮の雰囲気を作り出した。この雰囲気に包まれたのは地理学者だけではなく、マルクス主義的洞察の巨大な波が、1960年代末に社会科学全般に押し寄せ、それによってマルクスに傾倒した経済学者、歴史学者及び哲学者の力を強化した。その波は、ひとつには1960年代末の社会的混乱（アメリカのインナーシティの暴動、ベトナム戦争、学生運動、抑圧されたマイノリティ側の権利獲得への闘争）からも、そのエネルギーを得て、一見して不可逆的な道筋をたどって知的な景觀に変化し、大学に激しく押し寄せた。マルクス主義に転向した地理学者は、その波にもまれ、多くの者がその中に飲み込まれて自らの学問分野のアイデンティティを完全に忘却していった。私見では、その中にそこまで没入してしまうことは、決定的に重要であった。学問上の分業はある程度

までブルジョワ時代の発明であり、それもまた歴史的に理解されるべきである。マルクスは、伝統的・「ブルジョワ的」な学問分類と実証主義者によって提示された（人文—自然の区分に包囲された地理学者にとって非常に魅力的な）科学の統一へ向けたラディカルな再編との両方に対して、真っ向から反対する人間の知的努力の統一へのアプローチをすでに一定程度提示していた。それは、存在論的ではないにしても、基本的な認識論的再編成を必要とする。我々が完全に中立もしくは客観的言語の構築によって社会の「外」あるいは「上」に自らを置きうると見せかけることは、マルクスの見方では、すなわち「正しい」理解に対する主張を歪曲することであった。我々が社会における我々自らの存在を否定する第一歩を踏み出したとき、どのように「正しい」理解を追求できただろうか？問題は、その最初の段階から我々自身の努力の社会性を認識し、社会の境界線の内側から客観的知識の生産への道を発見することである。知識の生産というものを権力関係の体系の中で不可逆的に絡み合った政治的計画として捉えることによってのみ、我々はそれをなしうるであろう、とマルクスは主張する。それは、階級社会において知識の生産も必然的に階級闘争のダイナミクスの中で捉えられることを意味する。科学技術的理解の「合理性」は、その適用の正当性に加えて、全く単純に階級への適応性に依存する。階級的立場と階級の利益に対する自己批判的理解を通じてのみ、歴史的及び地理的展開の曲がりくねった変化と歪みに対する客観的理解を構築することが可能となろう。

確かに、マルクス主義者の努力には、無数の落とし穴と困難が付きまとった。そして、実証主義がそのモデル構築の中であえて考慮の外に置くか、あるいは単に手をつけまいままにしておいた全ての問題に対する即答が、マルクス主義には含まれているなどというつもりは、ここではない。この章では、マルクス主義的理解への道程が（知的にも、政治的にも）険しいが、非常に報われるものであることを示した（だが、当面のところ、政治的なものよりも知的なものに関して、そうであるといわねばならない）。しかし、筆者にとっては自明のことであるが（多くの者はこの問題を避けたいようであるが）、もし資本主義が社会・経済

及び政治的組織の遷移的形態である（ちょうどこの数百年に起こったことを考え、そのロジスティックな成長率が百年先も維持されねばならないことを想像すると良い）とすれば、誰かが、どこかで、それに取って代わるもの及びその変化の時期と道筋について考えていかねばならない。そして、もし世界があらゆる種類の問題—累積する債務と金融不安、軍国化、蔓延する失業及び多くの社会不安—に悩まされているとするならば、その時は、それらの現象及びその地理的ダイナミクスを批判的かつ客観的方法で説明する道を見つけることが重要である。たとえマルクス主義が日常の現実と直面して試みる説明が、不完全で、依然としてどこかに隙間があって決して完全でないと考える十分な根拠があるとしても、マルクス主義は少なくともその説明をあえて試みるのである。

現代地理学を「再モデル化」しようとするいかなる計画も、実証主義の限界及びそこから導出されるモデル化の努力の及ぶ領域の限界を認識すると同時に、マルクス主義の攻勢の成果を徹底的に考慮に入れなければならない。このことは、数学的表現、データ分析及び実験的設計の形式を全て誤りと判定するものではないが、これらの技法及び科学的言語一式も、より強力な歴史的—唯物論的分析の枠組みの中でこそ展開されるべきものであるということを主張するものである。しかし、実証主義、数学及びデータ分析の混乱は余りに深刻すぎて、その難問に簡単な解決を許すには程遠いのではないかと考えられる。しかし、次章においてスコットと筆者が論じているように、理論構築は我々の関心の中心でなければならず、そしてもし二世代にわたるモデル化の努力から生じた抽象化されたイデオロギー的な世界描写の弊害を取り除こうとするならば、我々はまさに歴史的—唯物論的理論をこそ志向しなければならない。

こういった方向に沿って地理学の再モデル化を求めるこのような主張は、必然的に政治的であり、そして歴史における集団の主体に関する概念に依拠しているために、多くの者によってイデオロギー的主張として理解されるであろうということとは、もちろん皮肉なことである。ここで主客をかれ、筆者が正しいと信ずることを反対意見として述べることによって稿を終わりたい。それはすなわち、自然科学の方法である抽象的唯物論に固執

する人々及びその枠組みの中でのモデル化の努力に終始する人々は、まさしく現代地理学におけるイデオロギーの製作者である、ということである。歴史における行為者としての我々の存在は、たとえ闇の手段によってイデオロギー的なものとして葬り去られうるとしても、我々の面前に遍在して

いることである。

(所収：Macmillan, B. ed.(1989): *Remodelling Geography*. Basil Blackwell, Oxford, UK, pp. 211-216. 翻訳版權取得済)